

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.153
2018/12/21

目 次

理事会報告	1
第 35 回年次大会の開催について	2
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	4
ホームページ改修作業について	4
第 24 回公開講演会報告	5
第 18 期評議員・理事選挙実施のお知らせ	7
第 5 回中東研究世界大会 (WOCMES Seville 2018) 参加報告	7
第 12 回アジア中東学会連合 (AFMA) 大会参加報告	11
韓国中東学会 (KAMES) 国際会議参加報告	11
真道洋子さんを追悼する (寄稿)	16
寄贈図書	17
会員の異動	17
事務局より	18
年会費長期滞納中の会員の皆様へ	18
編集後記	19

理事会報告

【2018 年度第 2 回理事会報告】

日時：2018 年 10 月 25 日（木） 18:00～20:40

場所：ビジョンセンター田町 407 号室（貸し会議室、東京都港区芝五丁目 31-19）

出席者：赤堀雅幸、大稔哲也、粕谷元、勝沼聡、栗田禎子、黒木英充、桜井啓子、
東長靖、長沢栄治、保坂修司、森本一夫、山岸智子、横田貴之
欠席者：近藤信彰、末近浩太、森山央朗（以上、委任状あり）、山口昭彦

〔審議事項〕

1. 第 25 回公開講演会の企画を承認した。
2. ニュースレター153号の編集案を承認した。
3. 第7回日本中東学会奨励賞の選考方法を承認した。
4. 人文社会科学系男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）のアンケート依頼への協力を承認し、同会への参加については次期理事会に申し送ることとした。
5. 第 18 期評議員・理事選挙の実施案を承認した。
6. 会費前納制の廃止について検討し、第 36 回年次総会（2020 年度）に諮るべく次期理事会に申し送ることとした。
7. SNS による広報について、まず Twitter アカウントを作成することとした。
8. ウェブサイトの管理等に従事する「広報委員会」の設置について、次期理事会に申し送ることとした。

〔報告事項〕

1. 第 24 回公開講演会（2018 年度）について報告があった。
2. 改修した学会ウェブサイトの 9 月 10 日公開と、今後のさらなる改修予定について報告があった。
3. 第 12 回アジア中東学会連合大会（AFMA）について報告があった。
4. 第 5 回世界中東研究大会（WOCMES Seville 2018）について報告があった。
5. 韓國中東学会（KAMES）国際会議について報告があった。
6. AJAMES 編集状況について報告があった。
7. 第 35 回年次大会開催予定について報告があった。
8. 会員の異動について報告があった。

（勝沼聡 事務局長）

第 35 回年次大会の開催について

前号（152 号）のニュースレターでお知らせしましたように、秋田での開催となり、会場は 1 日目が秋田市にぎわい交流館 AU（あう）（秋田県秋田市中通一丁目 4-1）、2 日目が秋田大学手形キャンパス（秋田県秋田市手形学園町 1-1）となります。大会の実施要項と研究発表の応募要項が下記のとおり決定しましたのでお知らせいたします。例年どおり、大会の 1 日目が公開企画と総会、懇親会、2 日目が研究発表（企画セッション含む）になります。どうぞよろしくご参集ください。

開催日時：2019 年 5 月 11 日（土）・12 日（日）

開催場所（1 日目）：秋田市にぎわい交流館 AU（あう）

開催場所（2 日目）：秋田大学手形キャンパス

大会実行委員会

委員長：縄田浩志

事務局長：西尾哲夫

委員：稲垣文昭、遠藤仁、菅瀬晶子、相島葉月、黒田賢治

1. 研究発表の申し込みについて

研究発表の申し込みは、個人研究発表、企画セッションともに、12月13日（木）をもって締め切りました。発表の可否については大会実行委員会から追ってお知らせ申し上げます。

2. 大会参加の申し込みについて

大会参加の申し込みについては、メーリングリストなどを通じて大会実行委員会から追ってお知らせ申し上げます。

3. 託児所の使用申し込みについて

託児所の利用をご希望の方は、実行委員会事務局までお申し出ください。申し込みの締め切り等につきましては、メーリングリストなどを通じて大会実行委員会から追ってお知らせ申し上げます。

4. 宿泊予約について

秋田市内の宿は数がそれほど多くございません。年次大会に参加される予定の方は、十分な余裕をもって早めに宿を手配されることをお勧めいたします。また、以下のサイトに秋田市内の宿泊施設の一覧がございます。参考になさってください。

[秋田市観光・イベント情報総合サイト アキタタッチ+]

<https://www.akita-yulala.jp/accommodation>

以上、何卒よろしくお願い申し上げます。

連絡先：

日本中東学会第35回年次大会実行委員会事務局

〒010-8502

秋田県秋田市手形学園町1-1

秋田大学大学院国際資源学研究科 縄田浩志研究室内

Tel: 018-889-3256（縄田研究室直通）／

018-889-3297（遠藤研究室直通）

E-mail: james2019akita@gmail.com

（縄田浩志 大会実行委員長）

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

- ・ たいだいま、34-2 号の編集を行っております。論文 3 本、研究ノート 1 本を掲載予定です。来年、2 月には刊行の予定です。
- ・ 35-1 号の投稿締め切りは、12 月 1 日でした。多くの投稿をいただき、ありがとうございました。現在、原稿の審査を行っています。
- ・ 35-2 号の投稿締め切りは来年 6 月 1 日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げております。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです（来年 4 月以降は編集長が交代しますが、E メールアドレスは変わりません）。

〒183-8534

東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 近藤信彰 気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@james1985.org

（近藤信彰 AJAMES 編集委員長）

ホームページ改修作業について

かねてより総会やニューズレターなどで随時ご連絡のとおり、日本中東学会のホームページは 9 月 10 日付でリニューアルいたしました。日本中東学会のホームページは最初に作成されてから、全面的な改修はほとんど行われておらず、とくにセキュリティ面での問題が指摘されており、改修は必須の課題となっていました。そのため、各種学会のホームページ作成や学術雑誌の編集などで高く評価されている株式会社杏林舎に委託し、全面的なリニューアルをお願いしておりました。

本来であれば、4 月の新年度とともにお披露目を目指していたのですが、諸般の事情により大幅に遅れてしまいました。ご迷惑をおかけした皆さまにはあらためてお詫び申し上げます。

今回のリニューアルでは、会員・非会員問わず、利用者の方々に日本中東学会に関わる情報をより見やすく、よりわかりやすく、またよりタイムリーにお伝えできるよう、デザインや機能を大幅に見直しています。また、コンテンツ管理システム (Content Management System、CMS) を採用することで、データの更新や機能拡張もより簡単になりました。

ただし、現時点では予算の関係もあり、サイト全体のリニューアルまでに至っておりません。したがって、当面は新旧ページが混在することになり、さらに一部ページには古い情報や間違った情報も残ったままになっています。この点につきましては、5 月の総会でも指摘されましたとおりで、まことに申し訳ございませんでした。

古い情報の訂正、リンク切れの修正、英文ページの改修、PayPal とのリンク等、リニューアル作業は今後とも継続いたします。古い情報、間違った情報等を発見した場合、事務局までご一報いただけると幸いです。Twitter との連携などさらに内容を充実させていく所存ですので、今後ともホームページの進化を温かく見守っていただければと思います。

とくに皆さまから要望の多い文献目録に関しては、セキュリティーの強化を含め、なるべく早急に改修作業を進めたいと考えています。

なお、ホームページ（最初のページ）掲載の写真に関しましては、たとえば1ヶ月に1度ぐらいのペースで変更していくことを検討しております。また、年次大会など日本中東学会の行事に合わせた写真も公開できればと考えています。会員の皆さまで、もし、ご自身の写真を提供いただけるという方がございましたら、こちらもぜひ事務局までご連絡ください（写真の著作権については別途ご相談させていただきます）。

（保坂修司 ホームページ担当理事）

第 24 回公開講演会報告

第 24 回公開講演会「若手中東研究者と語ろう！：現代中東における結婚と離婚」

日 時：2018 年 10 月 6 日（土） 11:00～12:30

会 場：横浜 YWCA 3 階ホール（150 名収容）

ゲスト：嶺崎寛子（愛知教育大学准教授）、山崎和美（横浜国立大学准教授）

司 会：桜井啓子

進 行：森本一夫

第 24 回公開講演会を横浜市内の YWCA（3 階ホール）にて開催いたしました。

今回の講演会は、講演会を聞きに来てくださる方に、中東の多様性、変わりゆく姿、そして日本との意外な類似や大いなる違いなどを伝えたいという思いから、多くの方に関心を持っていただけたようなテーマとして「現代中東の結婚と離婚」を選びました。また講師のお話にじっと耳を傾ける・・・というよりも、参加者からの質問とそれに対する講師の返答を繰り返すなかで、話がどんどん膨らむような双方向的な仕立てにできればと考えました。

会場としてお借りした横浜 YWCA のホールは、グランド



ピアノがあり、音楽会やダンスなどによく使われるというホールでしたので、その雰囲気を生かして机は置かず、講師を囲むように椅子を並べてみました。テーマから女性の参加者が多いのではと勝手に想像していましたが、男性の参加者が半数近くを占めていました。参加者の年代も若い方からご年配の方まで多様でした。



講演会では、最初に嶺崎寛子会員が、「現代中東における結婚と離婚：エジプトのムスリムの場合」と題して、一回目、二回目の離婚宣言を経て、三回目の「取り消し不能な離婚」に至るプロセスをわかりやすいイラストを使って解説したのち、エジプトの人々の離婚の実情や離婚相談に対するウラマーの回答例を生き生きと紹介してください、参加者の関心を一気に惹きつけました。続いて、山崎和美会員が、「現代イランにおける結婚（と離婚）」と題して、現代イランにおける様々な結婚の形、都市と農村、宗教的な家族と世俗的な家族の結婚観の違いなどを、日本でも上映されたイラン映画や新聞記事などを題材に紹介されました。動画や写真を使ったプレゼンに、参加者も興味津々でした。

お二人の効果的なプレゼンに触発されて、その後は、会場から途切れることなく質問があがり、まさにキャッチボール状態。進行役として会場後部に控えていた森本会員による絶妙な追加発言など、司会をした私自身がワクワクしすぎて、役割を忘れてしまいそうなほど、エキサイティングな一時でした。

会場からの質問をご紹介しますと、婚資金が払えず銀行で借金する人はいるのか、一夫多妻の比率はどのぐらいか、結婚前の男女の交際はどの程度まで許されるのか、結婚式の際に処女性を示す血痕のついたシーツは、実際どの程度回覧されているのか、イランで離婚時に夫が後払いの婚資金を支払えず投獄されるということだが、平均何か月ぐらい刑務所にいなければならないのか、刑務所から出てくると前科とみなされるのか、刑務所に入れば、支払いは免れるのか、ドメスティック・バイオレンスはあるのか、結



婚を重視するということだが、不妊治療はどの程度許可されているのか、イランの家族相談センターはどの程度機能しているのか、イランの法律では、女性に過失がない場合、離婚に際して夫は、家事労働の対価を支払うべしとなっていると思うが、どの程度、本当に支払われているのかなど、大勢の方から多くの質問が寄せられました。そのようななかで男性の参加者が、いろいろと話を聞いていると結婚するために莫大な婚資金や新居を準備するだけでなく、結婚後の生活費をすべて賄わなければならない男性が気の毒に思えてきた、女性よりも大変そうだと発言したことから、確かに・・・と会場からも賛同の声が上がりました。それに対して講師から中東では男性と女性には異なる役割が課されており、それぞれの大変さがあるという説明があり、参加者の多くがなるほどと納得したり。まさに会場と講師が一体となり話が進みました。また意外な質問をいただき、新しい研究の必要性に気づかされるなど、会員も大いに刺激を受けたことを付記したいと思います。

35名の参加者のうち25名からアンケート用紙を回収しました。アンケートから7割が一般（うち一名が共同通信の記者）の方、残りは大学生ということが判明しました。

アンケートの感想欄には、面白かった、楽しかった、和やかな雰囲気の中で質問しやすかったといった感想が多かったので、双方向的な会の開催という狙いはある程度達成できたのではないかと思います。しかし、広報については SNS 等の利用など、さらなる工夫が必要だと反省いたします。講師を引き受けてくださった嶺崎・山崎両会員に改めて感謝いたします。進行役を担ってくださった森本会員、会の運営を手伝ってくださった水上遼会員にも御礼を申し上げます。（桜井啓子 企画担当理事）

第 18 期評議員・理事選挙実施のお知らせ

すでにメーリングリストにてお知らせしたように、今期（第 17 期）の評議員・理事の任期が今年度末に終了するのに伴い、次期（第 18 期）評議員・理事選挙を実施中です。有権者は、過日メーリングリストでご案内したとおり、2018 年 11 月 21 日（水）までに 2018 年度分以前の会費を全て納入した正会員となります。投票の締切日は、2019 年 1 月 11 日（金）（当日消印有効）ですので、お忘れなくご投票いただけますようお願い申し上げます。（勝沼聡 事務局長）

第 5 回中東研究世界大会（WOCMES Seville 2018）参加報告

【全体報告】

世界大の国際学術大会として 2002 年に始まった中東研究世界大会は、同年ドイツ共和国のマインツ、2006 年ヨルダン・ハーシム王国のアンマン、2010 年スペインのバルセロナ、2014 年トルコ共和国のアンカラに続いて、第 5 回大会を開催するに至った。今回は、第 3 回に引き続きスペインでの開催となったが、2018 年 7 月 16 日から 20 日にセビリア大学を会場に、パネル数 357、シンポジウム数 16、ラウンドテーブル数 17 という充実した国際会議となった。

日本中東学会は今回、下記の2パネルを派遣した。

1. “Kurdish Studies in Japan” (パネル代表：今井宏平正会員)
2. “Transnational Social Movements in and beyond the Middle East and North Africa and Their Dynamism: Building Peace, Gender and Development” (パネル代表：鷹木恵子正会員)

各パネルの詳細については、代表による以下の報告をご覧ください。

この世界大会に第1回から連続して参加している日本は、今大会においても大きなプレゼンスを示すことができた。日本中東学会が派遣した2つのパネル以外にも数多くのパネルが企画・実施された。第1回に参加した日本のパネルは2つだけであったことを考えると、隔世の感がある。以前に比べると、若手研究者によって企画されたパネルが増えており、日本の中東研究の将来を期待させるものであった。

(東長靖 国際交流担当理事)

【パネル PA-004 報告】

Kurdish Studies in Japan 日本におけるクルド研究

日時：2018年7月16日(月) 14:30～16:30

会場：セビリヤ大学教室 212

座長：佐藤寛 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

本パネルは、日本中東学会 WOCMES 派遣パネルの1つとして組織された。日本貿易振興機構アジア経済研究所では、2015年度から4年間にわたり、クルド問題に焦点を当て、研究会を組織してきた。その背景には、近年、北イラクで将来的な独立の是非を問う住民投票が実施されたり、シリアで「イスラーム国」に対抗する唯一の勢力として、アメリカをはじめ、国際社会から支援を受けたりするなど、クルド人組織の重要性の高まり、そして日本においてこれまでクルド研究の蓄積があまり多くなかったことがある。

本パネルはこうした4年間の研究の1つの集大成であった。座長にはクルド問題に関する研究会の発起人であるアジア経済研究所の佐藤寛、パネリストは佐藤寛に加え、4年間研究会に関わってきたエネルギー経済研究所中東研究センターの吉岡明子、アジア経済研究所の今井宏平、そして中央フロリダ大学教授で30代後半ながら精力的な研究活動を行っているギュネシュ・ムラト・テズジュルから構成された。

まず、今井がトルコのクルド問題解決のための戦略とその挫折について検証したうえで、日本におけるクルド研究の概要とアジア経済研究所での活動について“Three-Level Games in Turkey’s Kurdish Policies”の題名の下に説明し、日本では他国と比して中東研究が盛んであるが、クルド人やクルド問題についての研究はまだ少ないことを指摘した。続いて、佐藤が日本に滞在するクルド人について、フィールドワークと難民

資格の視点から“Kurdish Problem in Japan”と題する発表を行った。吉岡は、2017年9月に実施された北イラクでの住民投票とその後の北イラク地域政府（KRG）の活動について“Relationship of Kurdistan Region to Iraq: From Federation to Referendum”と題して検証を行ったうえで、日本におけるイラクのクルド人に関する研究の動向について説明した。最後にテズジュルは“The Kurdish Question in Its Centennial: Democratic Struggles, Diplomacy, and Violence”という題で主にトルコのクルド人を事例として、トルコ政府とクルディスタン労働者党（PKK）の関係について PKK の発足から今日に至るまでの時期を包括的に検証した。

聴衆として、テルアビブ大学のオフラ・ベンジョー教授、イズミル経済大学のセルフン・アリ准教授など、クルド研究の第一人者が参加しており、活発な質疑応答が行われた。質問として多かったのは、日本に住むクルド人の現状に関するものであった。ヨーロッパに住むクルド人の現状もしくは活動に関する発表は多いが、日本に住むクルド人の現状についての発表は初めて聞いたという参加者が多かった。また、こちらからフロアに各国のクルド研究の現状はどのようになっているのかという質問を投げかけた。加えて、クルド問題に関する研究を実施する上での方法論、そして困難な点などについてもフロアとの間で意見交換を行い、大変有益な示唆が得られた。

最後に WOCMES へ JAMES パネルとして参加のため、日本中東学会より海外の研究者の旅費支援を頂きましたことに対し、ここにパネル参加者一同、厚く御礼を申し上げます。
(今井宏平 パネル代表)

【パネル PA-025 報告】

Transnational Social Movements in and beyond the Middle East and North Africa and Their Dynamism: Building Peace, Gender and Development

中東北アフリカにおけるトランスナショナルな社会運動とその動態：平和構築・ジェンダー・開発

日時：2018年7月16日（月） 17:00～19:00

会場：セビリヤ大学教室 102

座長：長澤栄治（東京大学教授）

ディスカッサント：アーザーデ・キアン（パリ・ディドロ大学教授）

本パネルは、日本中東学会 WOCMES 派遣パネルとして、また科学研究費（基盤研究（A））「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」（研究代表：長澤栄治）の下での公募研究会「開発とトランスナショナルな社会運動」の研究活動の一環として組織された。ICAN や #MeToo の事例を挙げるまでもなく、社会運動は今や容易に国境を越えた広がりや連帯を生み出し、時に世界や人々の認識の在り方を大きく変える力を持つようになっている。

本パネルでは、特に中東北アフリカの国々で始まった、平和構築、ジェンダー、開発などに関わるトランスナショナルな社会運動の4つの事例を取り上げ、それらがど

のような背景や目的で生まれ、国境を越えた動きとなり、あるいは国家権力との関わりから国外での活動を余儀なくされ、歴史的・政治的情勢下で運動方針や活動戦略などを巧みに調整し再構築してきているかについて、その実態と動態、可能性と限界に焦点を当てるかたちで研究報告を行った。

和平交渉の停滞と占領と暴力が継続するなか、2014年のガザ軍事攻撃を機に、イスラエル人女性たちが開始した Women Wage Peace 運動は、国境を越えパレスチナ人女性たちのあいだでも着実に支持を広げてきている。小林和香子（日本ユニセフ協会）による報告“Emerging Transnational Grassroots Women Peace Movement in Israel”では、運動の理念と実態や課題を分析し、そのトランスナショナルな広がりについて、2017年の現地調査を踏まえて検討した。

中西久枝（同志社大学）による報告“Searching for Gender Equality in Iran’s Contemporary Women’s Social Movement”では、現代イランの女性運動の特徴を『今日の女性』という女性ジャーナルの分析から明らかにした。現在イランには女性による社会的抵抗として二つの潮流がある。一つは若い世代によるヘジャブへの抵抗で、ソーシャルメディアを媒介にグローバルなムスリム社会運動のネットワークの影響を受けつつ展開している。もう一つは、女性の権利拡大を SDGs の目標 5「ジェンダー平等」の実現によって目指すもので、国家政策と一部連動した流れである。ともに組織的な運動にならない現実が指摘された。

幸加木文（千葉大学）による報告“Considering Transnational Aspects of the Gülen Movement outside Turkey: Political Conjuncture and Its Aftermath on Civil Initiatives”では、トルコの公正発展党政権との対立や 2016 年のクーデタ未遂事件の後、大規模な粛清の対象となったギュレン運動のトルコ国外の活動を分析対象とした。まず各国政府の対応を 3 つに分類し各々の要因を検討した上で、ドイツでの女性メンバーへの聞き取り調査をもとに、特にトランスナショナルな活動の状況と、その活動が限定的である点を指摘した。

鷹木恵子（桜美林大学）による報告“The Transnational Religious Movement of the Sufi Tariqa Alawiyya and Its Dynamism”では、20 世紀初頭にアルジェリアで創設されたアラーウィー教団の運動を対象に、移民とともに西欧諸国でも活動してきた歴史、また現シャイフの下、活動の幅を開発分野へも広げ、ムスリム・スカウト創設、環境保護やジェンダー平等の推進、また国連の ECOSOC の協議的地位の取得後、2017 年には国連の「国際平和共存デー」の新設にも尽力するという、グローバル時代におけるスーフィー教団のトランスナショナルな運動の可能性と課題について考察した。

報告後、パリ・ディドロ大学フェミニズム研究所所長の A・キアン教授から、各報告について、①女性運動が紛争に触れない理由、女性が和平プロセスに参加する意義、②女性の権利拡大と SDGs とを関連させる動きが本流とならない背景、③運動の政治性や現地の脈絡における影響力、トルコおよびトルコ系諸国での粛清の影響の広がり、④国家と教団の政治的関係、教団の思想と国連の SDG との関連について、コメントと質疑があり、各報告者から応答がなされた。またフロアーからも、特に SDGs と社会運動との関連について質問などがあり、終了予定時刻まで活発な質疑応答や議論が交わされた。

最後に WOCMES へ JAMES パネルとして参加のため、日本中東学会より若手研究者への旅費支援を頂きましたことに対し、ここにパネル参加者一同、厚く御礼を申し上げます。
(鷹木恵子 パネル代表)

第 12 回アジア中東学会連合 (AFMA) 大会参加報告

去る 2018 年 9 月 8～9 日に行われた第 12 回 AFMA 北京大会に参加した。AFMA への参加は、2016 年の前回ウランバートル大会に続いて 2 回目である。中国への訪問は、約 20 年ぶり 2 回目、北京は初であった。普段中東・エジプトに行き慣れた身からすれば、中国、それも首都の北京は、非常に高度な組織的統治が行われている場所のように感じられ、翻って自分が扱っているエジプト社会とは何か、ニザームとは何か、深く考えさせられた。とはいえ、いざ中国中東学会のメンバーと会い、話をしてみると、硬く複雑なシステムの中をすり抜ける柔軟さと逞しさを垣間見ることもできた。

大会は 2 日にわたり中国社会科学院の西アジア・アフリカ研究所で行われた。同院の内部には、複数の研究所が設置されており、緑豊かで静かな、素晴らしい研究環境であった。しかし昼食後の休憩中にエジプト政治研究の Wang Suolao 先生と昨今の社会・政治状況について話しながら中庭を散歩していたところ、鞆を持っていた左手に数匹の蚊が止まり、大変な賑わいであったのには閉口した。

自らの発表については、内容以前にパワーポイントの色合いについて工夫が足りず、会場から見づらくなってしまったことが最大の反省点である。8 日午前の発表であったので、終了後は気を取り直して、集中して他の発表を聞くことができた。特に興味深く感じたのが、韓国中東学会メンバーの発表であった。Alena Kulinich 氏のクルアーンで言及される「サービアン」の謎に関する発表、Kim Kangsuk 氏の韓国外務省との関わりをもとにした「過激派抑止戦略」の発表、そして Kim Swan 先生の UAE メディア産業に関する先駆的研究発表は、どれも具体的な情報をコンパクトにまとめられたもので刺激を得た。Alena 氏とは休憩中に若手研究者のキャリアについて意見交換したが、つい先日のニューズレター (152 号) を見たら同氏が日本中東学会に新規加入したようで驚いた。

個人的には、前回のウランバートル大会参加記 (145号) に書いたように、中国中東学会のYang先生との「次は中国で！」の約束を果たすことができたことが何よりであった。幸い次の約束はしていないので、しばらくは静かにしていようと思っているが、2年後になって、ゆるさと意外性に満ちたAFMAの魅力がじわじわくることをそれとなく予感している。
(竹村和朗)

韓国中東学会 (KAMES) 国際会議参加報告

2018年10月12日～14日、日本中東学会と友好関係にある韓国中東学会 (KAMES) 主催による国際会議“The Middle East in an Era of Transition: Reorganization of the Regional Order and the Search for Partnership”が開催され、日本からは会員10名が、さらに韓国在

住の佐藤紀子会員が参加した。会場はソウル市内にある韓国外国語大学校（Hankuk University of Foreign Studies）で、12日には歓迎のディナー、13日・14日はキーノート・スピーチの後、8つのセッションで20余の研究発表があり、活発な意見交換が行われ、JAMES の会員にとっても有意義な交流の時間を持つことができた。会議最後の食事会では、日本中東学会の黒木会長によるお礼のあいさつと記念品贈呈が行われた。

（山岸智子 国際交流担当理事）



参加者集合写真
（KAMES 提供）



黒木会長の挨拶
（二ツ山達朗会員撮影）



食事会
（二ツ山達朗会員撮影）

【参加報告 1】

2018年10月12日から14日にかけて、韓国・ソウルにて、韓国中東学会国際会議（KAMES 2018）が開催された。会場は韓国外語大学校、会議の全体テーマは“The Middle East in an Era of Transition: Reorganization of the Regional Order and the Search for Partnership”と設定された。会議の主催者は韓国中東学会、共催者は韓国外語大学校の中東研究所および同徳女子大学校のユーラシア・トルコ研究所であり、また韓国研究基金、対外経済政策研究院（KIEP）、韓国アラブ協会、UAE 大使館、クウェート大使館が会議のスポンサーとなった。

基調講演はカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の Prof. James Gelvin（中東現代史）が務め、“A New Middle East?”というタイトルで、中東における「アラブの春」以降の政治変動、そして米国の対中東政策の変化に関する包括的な分析を行った。会議のパネルは①政治、②経済、③文化・社会、④教育・言語、⑤歴史で、主催者によれば12カ国から約50名の報告者・パネリストが参加したとのことである。それほど大規模の会議ではないものの、参加者の国籍を増やし、議論を活性化させようという主催者側の意図が強く感じられた。他方で、参加者は大学関係者がメインであり、民間の研究機関や企業、政府機関からの参加は目立たなかった。

筆者は“Regional Intervention to Post-conflict Libya and Its Consequences: Who Are Supporting Whom for What?”とのテーマで、内戦後のリビアに対する外国の介入について、「代理戦争」とも形容される介入の構図が見られる一方で、非国家主体の活動によって周辺諸国の協力・対立関係に変化が生じているという旨の報告を行った。事前のパネルで、イタリア出身の研究者がリビア内戦における国内の社会的・経済的要因についての分析を行っていたため、現代リビア情勢について異なる視点からの報告・議論ができたのは有意義であった。同じパネルでは、シリア紛争に対するイスラエルの視点（イスラエル人研究者）、エジプト・シーシー政権の正統性（韓国人研究者）、トルコ・シリア・イラクにおけるクルド勢力とトルコの2014年選挙（米国人研究者）に関する報告があった。

多国籍の研究者が集う国際会議ならではの活発な議論が展開されたが、強いていえば、韓国人のリビア研究者と会う機会がなかったのは残念であった。韓国企業はリビア進出に積極的であり、内戦以前に契約された種々の開発事業の再開を強く希望している。韓国政府は2018年6月、トリポリへの大使館と韓国企業の復帰を9月初旬から進めると発表した（ただし韓国人に聞くと、大使館復帰は進んでいないとのこと）。しかし、8月には韓国人技術者がリビア南西部の石油・ガス田で誘拐されるなど、依然として治安リスクに直面している。この情勢を韓国がどのように見ているのか、もう少し深く議論してみたかった。

また、エネルギーや経済に関する報告はそれほど目立たなかった。韓国の中東へのエネルギー資源依存度は日本以上に高い（原油83%、天然ガス48%、2016年）。韓国がエネルギー安全保障の観点から中東情勢をどのように捉えているのか、個人的には興味深い点である。また、上述の通り、この種の学術的な国際会議に対して大使館がスポンサーとなることも、日本ではあまり見られない点であろう。

報告における議論のみならず、参加した研究者とのネットワーキングを含めて非常に有意義な経験となった。貴重な機会を頂いた韓国中東学会および日本中東学会に感謝申し上げたい。

(小林周)

【参加報告 2：経済分科会での感想を中心に】

韓国中東学会主催の国際会議(10月12日～14日)に参加させていただいた。KAMESのバク・ジェ・ウォン会長を初め、韓国側参加者、海外からの参加者、日本からの若い意欲的な参加者に変、お世話になったことに感謝したい。特に KAMES は年々意欲的な活動をしていることに強い感銘を受けた。

ここでは、私の参加したセッションにはほぼ限定して報告したい。今年の総合テーマは「移行期における中東、地域秩序の再編とパートナーシップを求めて」であり、流動化しつつある中東の現段階を位置づける作業を狙ったものと理解した。会議の各セッションは政治、社会、経済・歴史と社会、教育・言語と社会と文化、文化と社会など多面的な課題を対象としたものであった。同時に現実的な課題に対する関心も強いという印象がある。朝鮮半島自体が北朝鮮問題を含め大きな変動期にあることも、一種の緊張感と刺激を生んでいるといつてよい。13日午前中の全体会議である「政治(1)」でチョイ・ヨウング・チョル氏(ソウル・ジャンシン大学)の「サウジ王室の継承問題:2005年のケース」は現在のサウジ問題とも関連して興味深い報告であった。王位継承を巡る力学の分析であり、米国、エジプトまでアクターとして登場した。今年の夏、ワシントンで集中的に新たな資料を収集した成果の一部であった。次のマッテオ・カパッソ氏(イタリア・欧州大学)の報告「日常生活の願望の政治学:リビアにおけるバナナ、ドバイと革命」は、バナナ、チュウインガムを「豊かさ」の象徴とする言説、ドバイ・モデルへの幻想と実体などをリビア政治の中で扱ったもので、リビアを理解する別の視角・視点を与えられたもので興味深かった。

私は13日の午後、リー・クウォン・ヒュン氏の司会による第3セッション「経済」分科会に参加・報告を行った。ここではこの分科会に関して報告したい。司会のリー氏は韓国の代表的政府系経済研究機関である韓国経済政策研究所(KIEP)の指導的エコノミストであるが、中東のみならず他地域・世界経済さらに理論面などで関心の幅が広い。1年前に知り合ったが、今回は3回目の意見交換する機会となった。当初、私とは肌合いの違いを感じたが、今回の議論を通じてかなり気心が通じるようになった。問題意識の一部も共有できたように思う。今回も辛辣なコメントをいただいた。

「経済」部会では4人の報告があった。最初は私の「現代世界経済における非軍事的制裁の政治経済学」、2番目は東国大学校のキム・ジュン・クワン教授「レバノンにおけるシリア難民と地域社会への影響」、3番目はエジプト人で韓国外国語大学校(HUFS)留学生シマア・ハナフィー「エジプトのFDIの投資地域決定要因: 県別パネルデータを利用した実証分析」、4番目はマレーシアサインズ大学アドリン・ダト・マスード「イスラーム知識・ハラール理解・K-Pop 文化を通じる資産創造の新興フロンティア」である。

私の限られた時間のなかでの報告は、イランに対する米国の経済制裁の影響・意味に関するものであるが、対中輸入関税引上げ・貿易戦争も含めて考察の対象とした。

米国経済の相対的地位の低下にもかかわらず第3国とその企業に対する制裁（2次制裁）が有効に機能している背景は注目されるが、その説明要因としてグローバル化の中で進展したサプライチェーンの拡大と米国市場の牽引力を要因として指摘した。また米国によるイラン原油輸入ゼロ圧力に対する中国・インド・日本・韓国の対応の相違とその背景について分析した。コメンテーターはHUFsで中東経済を教えているエジプト人モアミン・ゴウダ氏であったが、私の指摘した2次制裁問題の背景に強い関心を持ち、その形成プロセスへの研究を深める上で適切なコメントをしていただいた。なお、私は2年来、現代資本主義は金融資本主義の第2段階として規定すべきであると提起しているが、それとの関連でトランプの貿易上の「反グローバル主義」と国際的金融資本と投資ファンドが「共棲・共存」しているメカニズムの解明の重要性をゴウダ氏に対して示唆しておいた。トランプに融和的な *Wall Street Journal* と批判的な *NY Times*、*Washington Post* の相違にもある程度関連している。

「経済」部会でのテーマはそれぞれ異なるため、個々の報告に関する印象を記したい。キム・ジュン・クワン報告はレバノンでのシリア難民の動態とその受け入れを巡る摩擦を扱ったが、その関連で現在起きている韓国のチェジュ島（済州島）での数百人のイエメン人難民を巡る地元民の間の強い反発を含む多様な反応に注目したものである。キム氏とは20年来の知己であるが、経済問題を社会・文化と含めて分析するのが得意である。シマア・ハナフィー報告は昨年同種の報告をさらに深めたものであるが、パネルデータ分析の魅力に惹きつけられる一方、データの信頼性はともかくとして行政的県単位でのFDIの決定要因の比較がどれくらい意味を持つのか、やや問題意識に改善すべき点を感じた。方法論の魅力に引きずられる余り、その適用対象の選定・問題意識があいまいになるのを私は方法論貧乏と名付けている。今後のこれを乗り越えた研究の発展に期待したい。アドリン・マスード報告は、イスラーム・異文化理解と致富が調和的に展開する可能性を指摘した、ややほほえましいものであった。特に韓国を議論の材料にしている点で独自性があった。（清水学）

【参加報告3】

私が日本のアラビア語教育、主にアラビア語合宿の成果について報告した「教育、言語、社会」パネルは、UAE、イラン、韓国の大学の研究者および私の発表だった。会場でもあったホスト大学が韓国外国語大学校であったせいか、韓国やアラブ諸国、イランの語学教育関係者らしき聴衆で、パネルはほぼいっぱいになり、日本の中東学会よりも言語教育に対して、関心が高いように感じた。発表後にもアラビア語教員の方たちと意見交換を行い、有意義な参加となった。特に私が主催したアラビア語合宿への興味が高く、韓国でも類似の合宿をぜひ行いたいと現地で教鞭をとるイラク人教員も伝えに来てくださったほどであった。その日の夕食会においても、韓国人とエジプト人のアラビア語教員の方と同じテーブルにつき、アラビア語教育の情報交換に加え、共通の知人についての話で盛り上がった。これまではアラブ諸国や欧米の方へ目を向けがちだったが、同じ志をもつアジアの研究者と交流ができたことに大きな喜びを感じ、今後も続けていけたらと願っている。韓国側の温かいホスピタリティにも感

激した。今回の参加にご支援をくださった日本中東学会の皆様に心よりお礼を申し上げます。
(鷺見朗子)

真道洋子さんを追悼する（寄稿）

真道さんは人を惹き寄せる人だった。早稲田大学イスラーム地域研究機構で、フスタート遺物、カイロのイスラーム建築、エジプトのコプト教会のデータベース作成の時も、彼女を慕う人々が研究室につどい、お茶の時間を楽しんだ。ガラスや石の持つ力の話、時には芸能界ネタも混じり、学生、若い研究者、事務の担当者などを巻き込んで。今は亡き湯川先生は「全く姦しいんだから・・・」と目を細めた。本庄校舎のフスタート遺物整理にも、数多くの人々が手弁当で参加した。彼女はそれぞれの人のことに親身になったからこそ、みんなが彼女の周りに集まった。私のカイロ行きにも気遣ってくれて、ラインのメッセージとスタンプで幾度となく元気付けてくださった。

彼女は、フスタート、シナイ半島のラーヤ、トゥールの発掘に携わった考古学者として、厳しく緻密な側面もあり、曲がったことや適当なことは許せなかった。彼女の先達、川床睦夫先生と共に中近東文化センターから離れ、イスラーム考古学研究所を立ち上げ、川床先生が病に倒れられたのちには、彼女が研究所を切り盛りした。カイロの事務所を閉じて収蔵資料をシナイ半島のトゥール・ハウスに移す、この後始末は彼女にとって大きな心の負担となった。眠れずに薬に頼る日も多いと呟いていた。2011年エジプト動乱以後、彼女はトゥール・ハウスの全てをエジプト考古省に移譲する決意をした。調査に参加したエジプト人や私なども、どうにか維持、あるいは図書を移動するなどしたらと提案したが、譲らなかった。彼女こそ、断腸の思いで切り離す決意をしたのだ。いい加減なこととはできないと。なお、身を切るような彼女の努力の結果、日本隊が心血を注いだトゥール・ハウスは、中近東文化センターからエジプト考古省へと移管手続きが進行中である。

世界的なイスラーム・ガラス研究者としての彼女の研究は、エジプトの発掘現場を超え、モノから見た交流の歴史へと発展した。近年は、ルーブルのチームのガラス担当者として、発掘フィールドを中央アジアのブハーラ近郊に広げ、来年度からはニーシャープール、そしてマディーナット・アッザフラーへと拡張を予定していた。ガラスを通して地中海世界とオリエント世界、さらにはインド洋世界を結びつけようとしていた。ここ数年温め続けた彼女の集大成としてのガラスの著作は、名古屋大学出版会から刊行予定であったので、なんとか形にしていけることが残された私たちの使命と感じている。

2018年9月15日、イスタンブール大学医学部のガッサール・ハーネで、真道さんと会った。鼻に傷はあったけれど、いつもの透き通るような白い肌で、目をつむっていた。カイロから持参したバラの香油で頬をさすった。ごめんなさい、もう少し早く来られたら……。それから、ご主人とガラス史学会に同行した石田さんと事故現場に向かった。赤信号を無視という報道には、真道さんがそんなことをするはずない。なんども一緒に旅をしたが、彼女は無理を通すような人ではない。だから、現場に行って自分の目で確かめたかった。8日朝の事故直前、自動車と路面電車をまたぐ通りを

南から北へ横断途中、真道さんと石田さんは西行きの線路と自動車道の間の 50cm ほどの分離帯に立って待っていた。なんの拍子かわからないけれど、彼女は西行き路面電車で右背後から巻き込まれた。フェンスと電車の上に倒れていたという。事故現場の検証もなかったとのことで、心が痛む。路面電車の録画装置が、真実を明らかにしてくれるだろう。搬送先のハセキ病院で、意識は戻ることなく、13 日朝に旅立った。

真道洋子さんは、名前の通り、真っ直ぐな道を通し、誰をも受け止める心の洋（ひろ）い人だった。トルコを旅した時、真道さんはモスクに行くとドームの下に仰向けになり、「こうしていると世界が見えるのよ」と言っていた。川床先生が亡くなった時、青空に漂う白い雲の写真が送付されてきた。今は、きっとその天空の彼方から、二人揃って私たちのことを見守っていてくださると。
(深見奈緒子)

寄贈図書

【単行本】

池田昭光『流れをよそおう：レバノンにおける相互行為の人類学』春風社、2018 年
高尾賢一郎『イスラーム宗教警察』亜紀書房、2018 年

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

『アラブ・イスラム研究』16 号、関西アラブ研究会、2018 年
『Japan-Saudi Arabia Society 日本サウディアラビア協会報 Sadaqah』239 号、日本サウディアラビア協会、2018 年

会員の異動

【新入会員】

磯部敦子

遠藤仁

押尾高志

神田惟

高畑遼平
Thikra Adel Abdul-
Qader

【所属・連絡先等の変更】

石川真作
岩瀬由佳

尾畑佐和子
河村有介

三代川寛子

事務局より

12月に始まった次期役員選挙などのため、事務局内も再び慌たしさを増しつつあります。今年度は、前納や年次大会時における年会費納入状況が思わしくなかったこともあり、会費未納により AJAMES 最新号をお届けできなかった会員の方々が数多くおられました。その後、年会費をお納めいただいた会員の皆様には AJAMES 最新号を順次発送する予定ですが、上記理由により事務局の業務量が増大しているため、お届けに少々時間を頂戴したく存じます。どうかご理解いただければ幸いです。

(勝沼聡 事務局長)

年会費長期滞納中の会員の皆様へ

日本中東学会細則 I-3 に定めるところにしたがい、長期滞納者（昨年度分から遡り 3 年間以上年会費を滞納中の会員。今年度の場合 2015～17 年度分、あるいはそれ以上の年会費を滞納中の会員）は、理事会による承認を経た後に退会（会員資格を喪失）となります。長期滞納者に該当する会員の皆様には、個別にメール・文書等によりその旨お知らせしておりますので、すみやかな年会費の納入を宜しくお願い申し上げます。

(勝沼聡 事務局長)

編集後記

2018年の年の瀬も押し詰まってまいりました。会員諸氏におかれてはますますお忙しくお過ごしのことと存じます。一年を振り返り、様々な感慨も抱かれるところです。個人的には平坦とはいいがたい、波乱の一年ではありましたが、自らの研究と生活を顧みるよい機会となったとも思います。学会の活動もまた毎年の繰り返しのようにみえて、常に新たな流れを含み込みながら展開していきます。第17期はほどなくその任期を終えようとしています。中東研究が活発であるためにある程度の仕事はできたと言ってよろしいでしょうか。第18期に申し送ることがらも数多くはありますが、学会のあることが多くの会員にとって意味あることでありますように、そして同時に、会員が学会を有効に活用し盛り立てる意志を持ってくださいることを願ってやみません。

(赤堀雅幸 ニュースレター担当理事)

日本中東学会ニュースレター 第153号

発行日 2018年12月21日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒108-8345 港区三田 2-15-45

慶応義塾大学文学部 勝沼聡研究室内

E-mail: james@james1985.org

<http://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)

銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808

(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)